

平成 6年 2月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 Tel0428-23-6859)

カモの季節

「カモ（鴨）」と一口に言っても、いろいろな種類がいます。分類上、ガンやハクチョウも含めて、ガンカモ目ガンカモ科としてまとめられているのですが、そのなかで、いわゆる「カモ」の仲間は32種類。もちろんこれは、日本では、の数です。もともとが水辺の鳥なので、多摩川も上流の青梅周辺では、あまり多くは見られません。青梅辺りでよく見られるのは、カルガモ、マガモ、コガモ、ヒドリガモ、オナガガモといったカモ達です。ただ、柚木～御岳にかけての多摩川では、例外的に山間部に住むカモ「オシドリ」の姿を見ることがあります。カルガモ等ごく少数を除いて、冬鳥のため、寒い季節は水辺でカモを探す好機です。

カモの仲間は大型で、性格もおとなしいためか、昔からよく人に利用されてきました。アヒルは野生のマガモを家禽化したものですし、最近、水田の草取りにも注目されているアイガモは、マガモとアヒルの雑種です。野生のカモを捕獲する方法も伝統的に伝えられています。昔は、これらの野生の、或は、家禽化されたカモ達の肉や、卵や、羽毛が人間にとって利用価値の高かった時代もあったのでしょう。カモ達の人々の好む性格を反映した言葉も幾つかあります。例えば、「カモがネギをしょって来る」、「いいカモにされる」など、カモにとっては迷惑な話でしょう。いつぞや、その当時の首相が「カモの水掻き」をコメントに引用していたこともありました。カモもとうとう政治家と一緒にされてしまったようです。しかし、いずれにしても、カモという鳥が、昔から人に親しまれてきたのは事実です。

今でも、このカモ達は人の注目を浴びることがあります。例えば、「カルガモのお引越し」。カルガモ自体は特別に珍しいカモではありません。青梅では多摩川筋だけではなく、丘陵部の水田でも一年中その姿を見ることができます。ちょっとした池があれば、人のいるすぐ近くでも産卵し、ヒナを育てるのでご存知の方も多いでしょう。このカルガモが、ヒナを連れて都心の道路を横切ると大事件となります。そして、今年の今頃は、「矢ガモフィーバー」。この騒ぎで、「矢ガモ」という名前がすっかり定着してしまいましたが、もちろんこういう名前のカモはいません。あれは「オナガガモの雌」。青梅では、多摩川の友田の辺りで姿が見られます。矢ガモは、人と動物との接し方、自然保護についてなど、いろいろな問題を残していきました。

身近な所で、文化財とまではいきませんが、時の人クラスのカモを見ることができます。

(文責 桜岡幸治)